

アビ科の鳥の理解（人との関係）

アビ科の鳥の生態をめぐる文化論的考察

企画者 藤井 格

去年の大会では「アビ科の鳥の理解(分布・渡り)」というテーマで自由集会を開催した。今年はその時の主催者である百瀬淳子氏に、人文科学的側面から、アビ科の鳥に光を当てていただく。

アビ科の鳥は古くから人間生活と関係が深く、北半球の国で多くの伝承が残っている。この鳥たちはイヌイット、サーメ、ネイティブアメリカンといった先住民族の間では、特別な存在になっていて、原始宗教シャーマニズムに彩られた華麗な伝承の主人公となっている。

日本でも源平合戦以後、この鳥に「平家倒し」の名前が付けられたエピソードは有名である。しかしさらに面白いのが、瀬戸内海で約 300 年前より行われていた、通称「あび漁」である。この野生生物と人間が共同で行なう世界的に稀有な漁法である「あび漁」の操業海域は、「アビ渡来群游海面」として 1931 年に国の天然記念物に指定されている。

今回の自由集会では、人文科学的フィールドワークとして演者自ら調査した結果や、日本とアメリカでの、この鳥たちに対する保全の取り組みなどを、調査にまつわるエピソードも織り交ぜて講演していただく。

少し長めの 90 分の講演の後に質疑応答の時間を 20 分予定しています。

日本鳥学会 2013 年大会 自由集会